

1 単元名 のどかプロジェクトⅣ

2 単元について

2年生でのプロジェクトは、「子どもたちが本気でやりたいことを見つけ、試行錯誤しながら没頭して取り組む姿」を大切にしながら、子どもたちが決めたテーマを友だちと一緒に追究する時間として取り組んできた。

テーマについては、昨年度から以下のことを子どもと共有してきている。(テーマの変遷は「活動の履歴」を参照)

- ① 好きなことややってみたいことを見つける
- ② 体験してすぐに終わりになるものではなく、目標やゴールをもって続けられることをやる

今年度は、さらにじっくり時間をかけて丁寧にテーマを決めるようにしてきた。初めからやりたいことが決まっている子はよいが、「自分は何に興味があるのか」と改めて問われると決めることが難しい子どもや、「テーマを決めたが想像と違っていた」など、「本気でやりたいものを見つける」ことに困難を感じる子どもも一定数いることから、今年度はテーマを決める期間を約1か月設定し、じっくり考えられるようにした。

昨年度の1年生の活動では、やってみたいことが見つかって、子ども達が行える興味関心を広げる手段や方法が少なかった。しかし、2年生での活動では、これまでの様々な経験を活かしたり、ICT機器を活用したりすることで、自分達でどうしていきたいのか考えながら取り組んでいく姿が見られるようになり、テーマに向かって取り組む期間も以前よりも長くなってきている。

また、2年生になり、教師の手を借りずに活動を行えることが増えたことで、子ども達に活動をゆだねることが多くなっていった。教師も子どもの気持ちに寄り添いながら一緒に活動を作っていくとすることで、昨年度よりも「子どもが何をしたいのか」という視点で子ども達の活動を見ようと心がけるようになった。昨年度の研究により、より細やかに子どもの姿を見取れるようになりたいと考えるようになったことが、教師の見とりが変化したきっかけである。例えば、「この子は今どこに興味を向けようとしているのか」など、同じプロジェクトでもよく見ると個々に違いがあることに気づく。そういった小さな違いにこだわりながら、子どもと接していきたいと考えている。

1学期は、子ども達と話し合い、「プロジェクト祭りを開催し、1年生を招待すること」をプロジェクトのゴールとした。「1年生へ伝える」という視点をもつことで、プロジェクトの活動をまとめていくことや、活動していることを整理し直すきっかけとなっていた。同じ活動をしているプロジェクトの仲間、クラスの仲間、そして1年生との関わりから、他者との違いを感じたり、他者の思いに寄り添ったりすることも、プロジェクト活動を通して、大切にしていきたいことである。

2学期はコロナ感染予防の観点から、1年生との交流は(9・10月の段階では)難しいということを子どもたちに伝えた。そのこともあり、1学期のような「プロジェクト祭り」として一斉に発表するという形式ではないゴールや、1年生以外の人へ伝えたいという相手意識の変化も出てきた。

そして、10月25日、28日の2日間「プロジェクトデー」を設けた。「プロジェクトデー」では、専門家の方との活動や、専門の施設等に行き活動を行った。この経験を通して子ども達の興味関心がさらに広がり、「やりたいこと」がより明確になるのではないかと考えている。

3 低学年部会のテーマとの関連

●子どもの視点でとらえていくことで「子どもがプロジェクト活動で求めていること」を探る

低学年部会では昨年度から、「実践者が、子どものどのような姿を、どのように見ているか。」ということ、
「教師の記録(記述)」と「対話」を通し研究してきた。今年度の研究では、昨年度の研究の中心となった「教師の見とり」の中でも、特に「子どもの視点でとらえること」に注目し、「子どもがプロジェクト活動で感じていること」を捉えたいと考えた。子どもがどのようなことをおもしろがり、他者と関わりながらどのような学びを展開し、自分を更新していくのかなどについて、実践者が子どもの視点でとらえようとする中で、「プロジェクト

活動で子どもが本当にやりたいこと」が見えてくるのではないか。そのような考えから、教師が見とる子どもの姿（記述）に着目し、低学年の子ども達にとって「プロジェクトとは何か」について迫りたいと考えた。

そして、教師が記録した記述（実践記録）にある子どもの姿や教師自身が関わった子どもの姿をメタ的に省察・考察することから、「教師がその気づきを次の実践にどう活かそうとしたのか」「そのためにどのような手立てが考えられたのか」といった、次の学びを生み出すための可能性を考察していく。子どもたち自身がどのような願いやねらいをもって活動に向かっているのかを丁寧に把握しつつ、それをどのように活動全体のねらいに反映させていくのかについて具体的に考え、その記述を基にした教師同士の対話と、さらなる省察の記述を繰り返していくことで見えてくる子どもの姿から、低学年教育におけるプロジェクトの意味を捉え直していく。

子どもたち個々の願いや葛藤、そしてそのような感情との向き合い方の変容を迫りかけていく中でこそ、プロジェクトを通してメタ認知スキルや社会情意的スキルが刺激されたり発揮されたりしている場面が見えるはずである。今回の授業研を対話の機会の一つと捉え、そのような子どもの現れをどのように意味づけ直していくことができるのかを探りたい。

【編み物プロジェクト A 君に対する記述】

指あみが得意で、家族でスキーによく行っている A 君。スキー場に行く時に付ける自分用のマフラーを作りたいと 2 学期から「編み物プロジェクト」を Y さんと 2 人で立ち上げた。「指あみは幼稚園の時から得意なんだよね」と言っていたので、指あみからのさらなるレベルアップとして、教師から鍵あみを提案し、挑戦することにした。(9 月)しかし、編み方のプリントや、動画を見ながら編んでみてもなかなか編むことができなかった。Y さんは、動画を見て少し編むことができたが、A 君は何度かチャレンジしても、編むことができず、2 時間取り組んだが、1 目も編めず、「わけわからない」「もうやめる」と断念してしまった。そこで、A 君に教師から昨年度えらぶの教材にあったリリアンを提示した。1 年生の時やったものよりも目の数が多くなる大きな編み機と一緒に作り、「これで編めば、マフラーができると思うよ」と投げかけた。A 君は、リリアンの編み方を理解すると、どんどん長くなっていくマフラーの様子を面白がりながら、プロジェクトの時間だけでなく、朝の時間や休み時間なども編むようになった。また、いろいろな色の毛糸を使って、途中から色を変えることにこだわり、「ここは夕焼けの色にしたよ」と色の組み合わせを楽しみながら編んでいた。

そして、10 月になり、マフラーが完成した。完成したマフラーには、Y さんが鍵あみで作ったお花をいくつも縛り付けていた。「こんなに長くできたよ」と嬉しそうに教師のところを持ってきた。「長さを測ってみたら」と促すと、1 m ものさしで、長さを測ったり、自分の身長と比べたりした。

マフラーを完成させたことに自信をつけた A 君は、その後再び鍵棒を手にした。再び鍵編にチャレンジした理由として、編み方を教えてくれる二人の存在が大きい。1 人は、毎週水曜日のプロジェクトの時間に来ているインターンシップの学生で、鍵あみが得意で、A 君と Y さんと一緒に編むようになった。もう 1 人は、Y さんの存在である。Y さんにも編み方を聞きながら、A 君は編み始めた。

10 月 22 日のプロジェクトの時に、A 君は初めてお花のモチーフを完成させた。とてもうれしそうに「先生、初めてできたよ。これはお母さんにあげるの。」と見せてきた。「すごいなあ。先生もいつか作ってほしいな」というと、「オッケー、すぐ作るから待ってて」と戻っていき、教師の分のお花も作って渡してくれた。

4 学習指導計画（年間の活動の第 4 ターム：全 3 5 時間）

- ① 専門家の方との出会いや関連する施設の見学等を通して、自分の興味関心を広げる。(プロジェクトデー) (8時間)
- ② プロジェクトデーでの活動を振り返り、ゴールを見直したり、ゴールにつながる活動の計画を立てる。(3時間)
- ③ ゴールに向けて、活動を行う。(本時) (3/20)
- ④ グループごとに発表の場を設けて、プロジェクトのまとめを行う。(4時間)

5 本時の学習について

(1) 本時のねらい

プロジェクトデーでの学びを活かしながら、目標やゴールに向けて活動を進める。

(2) 予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
1 本時の活動や流れについて全体で確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・場の確認と、終わりの時間の確認をし、自分達でいつ片付けをすれば間に合うのか等、考えながら活動をおこなえるようにしていく。 ・プロジェクトデーの経験や気づきを活かせるよう、他のグループの例示を必要に応じて行う。 ・密にならないよう、お互いの距離を十分にとって活動するようにする。 ・本時の活動の振り返りと、次時の活動の計画をグループごとに集まり、ノートに記入する。
2 各グループごとに活動を行う。	
3 今日の活動の振り返りと次回の活動に向けての確認を行う。	
4 学習のまとめ	